

余滴 投込寺小景

河原 晴樹

黄菊濃し雨上りたる遊女の碑

これは、浄閑寺の墓地の情景である。

一昨年の秋の早朝、私はここを訪れた。前夜から降り続いた雨が止み、雲間から射し始めた日の光が、清々しい空気を貫いて、供えられた花を照らし出していた。雨に洗われた花は、どれも鮮やかで瑞々しかったが、とりわけ大輪の濃い黄菊の美しさが、目を引いた。

浄閑寺は、東京都荒川区南千住にある浄土宗の寺である。この寺は、往年の遊廓吉原に通う日本堤の北端に接している。

日本堤の内側には、遊女たちの逃亡を防ぐために掘られた堀が廻らされ、それは、かつて「おはぐろどぶ」と呼ばれた。生前この堀の内に閉じ込められた遊女の多くは、死ぬと引取り手のないまま、浄閑寺の境内に投げ入れられた。この寺が、通称「投込寺」といわれる所以である。

遊女たちの身の上は、「生れては苦界、死しては浄閑寺」（花酔）と形容されて、同情を誘い、永井荷風他、多くの文人たちが、ここを訪れた。現在でも参詣人が絶えない証拠に、供えら

れた花は量が多く、いつも新鮮である。

この朝、私も、墓前に用意された手桶から柄杓で水を汲み、墓石に掛けた。

秋深し遊女の墓に注ぐ水

墓は、三メートル四方、高さ一・五メートルくらいの石組で、その上部に、石地蔵とともに、石碑が置かれ、「新吉原總霊塔」と刻まれている。石組の前面に、光背を持つ観音像が立ち、その回りには、献花のほか、簪や女扇など、他所では見られない物が供えられ、いかにも遊女の墓らしい風情を醸し出している。

昨年、ある人をそこに案内したら、その人は、「口紅が……」と言った。見ると墓の右手側後方の石組通気孔の所に、長さ七センチほどの円筒状の銀色のケースが置かれていた。なるほど、口紅に違いない。

それにしても、墓場に口紅を供えてあるのが、私には珍しく、正面でなく、目立たない側面後方に置くという心遣いとともに、

強く印象に残った。折しも晩秋であった。それまでも、幾度か、この場所に足を運んでいたが、遊女の境界と現代との接点が、この時ほど強く心に刻まれたことはなかったのである。

行く秋やルージュ置かれし遊女塚

(二〇一一・八・一五 稿)

「かわはら・はるき 俳人・エッセイスト」

〔追記〕

浄閑寺は、榮法山清光院と号する。

一八五五（安政二）年の大地震の際、新吉原の多くの遊女が投げ込み同然に葬られたことから〈投込寺〉と呼ばれるようになった。一九六三（昭和三八）年には、「新吉原總霊塔」が建立され、その後も二〇〇〇年代の今日に至るまで、多くの女たちの骨壺が納められている。

永井荷風は、遊女の生涯に思いを寄せて、しばしば浄閑寺を訪れている。それを記念し、谷崎潤一郎他の有志によつて、「總霊塔」建立と同年、塔の左前方に、荷風碑が建立された。この碑の側壁には、〈今の世のわかき人々 われにな問ひそ……〉に始まる「震災」と題する荷風の詩が刻まれている。

なお、文中掲出の俳句の中、〈黄色濃し〉〈秋深し〉の二句は、二〇一〇年の、いずれも秋の荒川区俳句大会で入賞した。

ところで、二〇一〇年大会翌月の「毎日俳壇」に、横浜市在住の投句者による〈身に入むや紅供へある遊女塚〉が特選として掲載された。私の〈行く秋や〉の句と同趣のようにも見えるが、発表は私の句が先立つものであることを記しておきたい。